

決断のとき

会員 中山 千里

要 約

大学を卒業して就職してから一貫して知財職でキャリアを形成してきました。何度も岐路に立ち、選択し、決断してきましたが、その時々決断は、意識的な選択、無意識のうちの選択、自ら機会を作り出した上での選択など、色々な形がありました。キャリアの前半は、企業知財で、特許に無縁の文系女子でありながらスタートしたため、知財職としての面白さを見極めたい思いで周縁から中心へと志向し、弁理士資格を取って、実務経験を積もうとしてきました。その後、夫の海外勤務に同行して転居・退職し、出産した充電期間を挟み、帰国後のキャリア後半は、ワーキングマザーとして、かつ、プロフェッショナルとして、閾値を超える仕事量を確保しながら進んできました。この間、特許事務所で勤務し、その後、企業知財へ回帰しています。いつも、座右の銘としていたのは「縁と運とタイミング」です。

目次

1. はじめに
2. 最初の岐路 | 特許部への配属
3. 核を求めて
4. 実務の足がかり
5. 海外への転居と退職
6. 帰国、キャリアの再開
7. メインフィールドへの回帰
8. 専門職種でのマネジメント
9. おわりに

1. はじめに

この春、上の息子が高校を卒業しました。思えば、彼がお腹にいるときに退職してカナダに転居し、カナダで出産して5歳で帰国したのです。月日のたつのは早いものです。自分自身も50代に入り、定年までの残された期間を思ったり、来し方を振り返ることが増えました。私の座右の銘は「縁と運とタイミング！」なのですが、岐路に立ったときには、この座右の銘を唱えながら、これに乗って「えいっ」とばかりに決断してきたように思います。今回、記事を書く機会を頂きましたので、これまでのキャリアを、その時々決断という観点で振り返ってみたいと思います。

2. 最初の岐路 | 特許部への配属

弁理士をしていると、「ご専門はなんですか？」と聞かれる機会が多くあります。質問される方は、「電気」とか「化学」、「商標」といった回答を期待されているようです。そこには、バックグラウンドが何か、という問いが含まれています。そして、これはバックグラウンドがもはやしている私にとってはいつも悩ましい問いでもあります。

語学系の大学を卒業して就職したメーカーでの配属は、それまで全く聞いたことがなかった「特許部」でした。さすがに会社側が文系女子に特許の出願業務をさせようと考えていたわけではなく、当時増えてきていた海外との係争やライセンスのアシスタントとして、英語で通信ができる人材をという意図だったようです。

法律の素養もありませんし、「特許」などという言葉はそれまでの人生で耳にしたこともなく、ましてや特許公報など見たこともないという状態だったので、なにかもが未知との遭遇でした。最初の仕事として渡されたのが特許の英文ライセンス契約で、「翻訳してみてください」と言われて前文の「Whereas」に固まったことをいまだに覚えています。

このように、知財職のスタートは、全く主体的な選択でも決断でもなく始まりました。これが私の一生のキャリアに繋がっていくなんて、当時は夢にも思っ

いませんでした。

3. 核を求めて

特許のライセンス契約の締結やその結果のロイヤルティの支払い事務、特許係争窓口のアシスタントを担当していましたが、このような業務は、特許の仕事の中ではかなり周縁に位置しています。対象となっている特許権や自社の製品がどんなものか、その関係はどうか評価されているのかなどは当時の自分の仕事ではなく、技術担当者から説明されたことを丸ごと受け入れていましたし、正直なところあまりよく分かっていなかったと思います。ライセンスを扱うにしろ、係争にしろ、対象の特許や製品の中身が自分でちゃんと理解できて読み解けてこそ適切な対応が可能になる、という信念を持つようになるのはずっと後になってからです。この当時は、契約自体そもそもどういふものなのかもあまり分かっていませんでした。

このままずっと現在の仕事を続ける訳にもいかないし、それではつまらない。もっと中心に近づいた方が面白そう、と漠然と思いましたが、なにしろ筋金入りの文系で、数学や理科がやりたくなくて語学系に進んだようなものでした。とても自分に特許の実務ができるとは思えなくて、まずは、契約周りから攻めてみることにしました。そこで、体系的に学ぶには、やはり大学がよいのではと思って法学部の通信課程に学士入学し、3年かけて卒業しました。卒業までの間、単位取得のために1ヶ月の休暇をもらってスクーリングにも行きました。特に渋い顔もせず休ませてくれた太っ腹な当時の上司にはとても感謝しています。ここで勉強したことは、知識としてすぐに実務に反映されるというよりは、その後のキャリア全体の土台に吸収されて通奏低音のように鳴っていると思います。しかし、当時の自分は、もっと即効性のあるものを求めており、あまり手応えが得られず残念に思った覚えがあります。

それでも、法律の素養が一応できたということで、弁理士試験に挑戦してみようかという気持ちが出てきました。司法試験受験も考えたのですが、難度があまりに高かったのと、今の仕事の真の面白さを極めないままに他に行く形になるのも惜しいような気持ちがあり、もっと中心に向かうことを志向しました。また、特許は、法律と技術の交錯と言われており、技術側から攻めるのがハードルが高いのであれば、法律側から

行ってみよう、とも思いました。

当時の勤務先には、弁理士試験の受験生が複数在籍されており、それまでに合格者も何人も輩出していて、弁理士受験には恵まれた環境だったと思います。受験生だった隣席の先輩に受験の方法を気軽に聞いて、割と軽い気持ちで始めました。よくよく聞いてみると、当時はまだ合格率が相当低い時代で、一大決心であるはずなのですが、資格を取るというよりも、中心に近づきたい思いが強かったので、大学に行ったのと同じように、体系的に知識を身につけることを目的にしていました。

4. 実務の足がかり

幸い、ほどなく弁理士試験に合格し、登録を得ましたので、「実務経験を積みたい」と申し出て、ライセンスなどを扱う技術法務から特許実務のグループに異動しました。自分としては、「資格」という大義名分を得たので、会社側も断りにくいだろうと踏んだのですが、当時の上司や部門長がどのように評価していたのかは不明です。今から思えば、資格者が会社にとってさほどの意味があるわけではなく、「まあやらせてみようか」程度だったのではと思っています。

やらせてみて、その後の実績のいかんによっては、そのまま特許実務を継続する、技術法務に戻す、ということが考えられたのではないかと思います。実績を積む前に退職してしまったので、結果は出ないままです。今でも、技術系のバックグラウンドがない人を、特許系の知財職として育成するにはどうしたら良いのか、と悩むことがあります。当時の自分が部下だったらどうするだろうとよく考えます。

いずれにしても、まだまだ高かった弁理士会の登録費用も会費もポンと出してくれ、弁理士の職印も作ってくれた、ありがたい会社でした。

当時の勤務先は、国内出願の相当割合を社内で明細書を書いて出願していました（いわゆる内製）。そこで、製品にまだ直結していない、アイデアベースの発明の出願実務の初歩から始めました。提案書を見た後で発明者にヒアリングに行き、内容を把握して、請求項のドラフトをし、ベテランの指導者に見てもらった。当時は改善多項制が開始されてまだそれほど時間が経っておらず、クレームを多段に展開するのに試行錯誤していた覚えがあります。

幸か不幸か、当時は大量出願の時代で、年間1人

100件の内製ノルマとか言われていました。今よりも1件1件のボリュームはずいぶん軽かったとはいえ、相当量の経験を積むことができ、1年が経過するころには、中間処理も経験してみましようか、と進んで行きました。

また、特許庁の面接ガイドラインで、弁理士以外の補助者が審査官と面接するのが不相当とされたため、外部代理人のついていない案件で面接をするときには社内弁理士を同席させるという社内ルールができました。当時は面接を盛んに行っていたため、数人いた社内弁理士は、自分の担当でなかった案件でも大量に面接に立ち会うことになり、大忙しでした。せっかく資格を持っているのだから使えということ、こうした面接にも行かせてもらい、良い経験になりました。

5. 海外への転居と退職

仕事の幅が広がってきたのを実感できて、面白くなってきたのですが、私生活では結婚して数年が経過しており、夫に海外転勤話が持ち上がり、近い将来北米へ、という状況になっていました。上述したように、当時は明細書を自分で書くという特許業務の基本の仕事に希望して異動し、ようやく慣れてきた程度のところ。中間処理はまだ始めたばかりでした。キャリアという点で考えれば、そのままもう少し経験を積みたい。このままとどまれば、ベテランの指導の下で経験値を積めることははっきりしていました。

要するに、せっかく資格を取って、それに見合うだけの実務経験が詰める環境を整備したのです。今それを手放すのは勿体なく、数年間の別居を覚悟していったん夫を送り出しました。

しかし、半年ほどして思い直し、退職して夫に合流しました。大きな決断になりますので、色々考えたのですが、理由として一番大きかったのは、しばらく別居してみてやはり夫と離れて暮らしたくないという単純な思いが強かったからだと思います。また、これ以上の「縁と運とタイミング」もないだろう、これに乗らずにどうする、と思ったということもあります。海外での生活経験はいつでも望んで得られるものではありませんし、30代に入っていたので、子どもを持つならよい時期だろうという思いもありました。

とはいえ、職業人生、という視点で見れば、それまで積んできた9年弱のキャリアの中断であり、退職し、弁理士登録も抹消、帰国時期は決まっておらず、

その先どうなるのかがよく見えていない中での決断となりました。女性の再就職制度が整備されつつあった時期でしたが、まだあまり活用事例は出ておらず、出産して復帰する女性も少ない時代でした。この先どうなるかという不安は大きかったのですが、考えても結論が出ませんので、敢えて考えないようにしていただきたいと思います。

いずれにしても、一旦退職するにしても、このまま一生専業主婦になるつもりは毛頭ありませんでした。勝手に取った長めの育休くらいのつもりでいましたし、まだ若くて楽観的だったので、資格があれば就職先くらいは見つかるだろうとも思っていたのです。

結果として、30代という体力気力が最も充実し、仕事に投入できるエネルギーが最も高いであろう10年の大半を、キャリアにはではなく、充電・自己投資に向けることになりました。6年弱をカナダで暮らし、2人の息子を出産、生活と子育てを楽しみながら英語とフランス語の語学学校に通い、現地の大学の法学部で学びました。

カナダで暮らした期間の経験は、自分の考えの幅を大きく広げることになり、子育ての経験と相まって、人生を充実させる要因となっています。一方で、6年のキャリア中断は、かなり大きくもあり、ストレートにキャリアを積んできた周りと比べてはっきり周回遅れになっている大きな要因であると思います。周回遅れなのは、キャリアの中断だけが原因ではなく、その後の歩き方にも大きく拠っているのですが、根本の原因であることには違いありません。

6. 帰国、キャリアの再開

6年弱の海外生活を終えて帰国してからは、かつての職場の先輩が独立して開設した特許事務所に勤務することになりました。この段階でこの先どうしようというのはあまり明確にはなっていませんでしたが、知財の仕事から離れるつもりはなく（なにしろ他の仕事はできませんし）、弁理士資格を生かしてキャリアを再開・継続することは改めて意識しなくても自分の中では大前提になっていました。

初職の退職前に始めていた特許実務は、冷静に見れば基礎を作ったところまで行っていませんでしたし、5年以上のブランクは知財の世界ではかなり長く、法制度もずいぶん変わっていました。ブランクを埋めて知識をアップデートしつつ、特許業務のコメたる出願

権利化をみっちりやる機会にすべきと考えました。

一方で、子どもたちは5歳と1歳。帰国前も保育所に預けていたというものの、大学に通うためのものであり、時間の余裕はありました。フルタイムでワーキングマザーをするのは初めてです。日本では、住宅、交通などの事情も、子育てに対する意識も異なります。この環境下で息長くかつプロフェッショナルとして働けるような仕組みを作る必要がありました。

キャリアは一生続けるつもりでしたし、ただ続けるだけで終わるつもりもなかったもので、次のレベルに上がるだけの実力をつけていく必要があります。残念ながら、そのためのショートカットはなく、一定量の時間と頭脳労働量を、しかもずるずる長く細切れにするのではなく、それなりの期間内に集中投下する必要があります。

とはいえ、そちらばかり見ていて子どもに目配りができなくなったのでは、出産という選択をした意味がありません。

子どもたちは、保育園から小学校・学童保育所へと進み、幸いなことに病気や怪我も多くはなく、日々の送迎と家事と会話で過ごしていきました。保育園や学童保育所に通ってれば、保護者としての活動もありますが、そこそこの活動量があったと思います。小学校では、PTA活動も行いました。

子どもを育て、共に生きるのは、確かに人生が豊かになります。家族でスキーに行く、旅行に行く、ゲームをする、など休暇も色々楽しみました。

ということで、子どもたちの生活ペースをまず確保、その周縁で、閾値を超えるだけの仕事量をこなすように意識しました。

裁量労働であったため、突発事態に備えて毎日仕事は持ち帰り、翌日急に出勤できなくなっても、遅刻や早退する羽目になったとしても対応できるようにしていました。子どもの急病のときには、夫と午前・午後でバトンタッチもよくやりました。フレックスタイムとはいえごく普通の会社員であった夫はそこまで融通の利く職場ではなかったと思いますが、最大限負担を分散してやってきました。このために、帰国の際は、両方の職場に近いところに住居を決め、フットワークを優先して車で通勤していました。車に乗れば自宅にも保育園にも10分～15分で到着できるという環境を十分利用して、職場と自宅を行き来して、支障が出な

いようにしていました。

この時期は、子どもに物理的に時間と手が掛かる時期であったため、閾値を超える仕事量は確保しつつも、働き方の柔軟性を重視していました。その意味で、チームで働くことが少なく、一人ではほぼ完結できる特許出願実務はうってつけでした。自分の裁量で済ませることができる範囲が広く、周りの協力を取り付ける必要性がそれほど高くありませんので、夫との間でしっかり考え方を共有し、実行できていれば、職場など外部で調整に疲弊するといったこともありませんでした。

いま、企業内で子育て期間中の部下を持つてみると、子どもの都合で突発的に休む必要があり、持ち帰って仕事ができるわけではない中、個人の裁量でなんとかできる範囲はとても狭いと感じます。職場の側が、そのつもりでバックアップ体制を組まなくてはなりません。ともするとそれは通常を超えた負荷に感じられますので、軋轢を生むこともあるのではないかと思います。職場の側にも、子育て中の働き手の側にもバックアップが必要だと思います。物理的にというよりも、こうすればうまく回る、といったコツ、知恵の伝承が重要に思います。

都合6年ほどこちらの特許事務所にお世話になりました。望んだとおり、出願実務をみっちり行うことができましたし、後進の指導や事務所のマネジメントにも携わり、種々の経験ができました。ここで特許の権利化実務を自らしっかりやったことが、後に係争渉外業務を行う上でのコアとなりました。以前のように、人から言われたことを鵜呑みにするのではなく、自ら評価をすることが可能になり、対応に自信が持てるようになったと思います。

7. メインフィールドへの回帰

子供たちが物理的に手がかかる時期を脱し、具体的には、下の子が小学校に入った段階で、企業知財に戻りました。特許事務所での仕事は、自分にとっては、基本を押さえるためのいわば「修行」であり、また、働き方の柔軟性をキープするためのものでした。これらの優先度が高かったために選択していたオプションだと言えるでしょう。

とはいえ、特許事務所での仕事を始めた当初に、これが一時的なものであると決めていたわけではありません（一生続けようとまで思っていたわけでもありま

せんが)。3年経ち、5年経つうちに、企業の側にもう一度立ちたいという思いが強くなってきたのです。

それは、一言で言えば、意思決定をする側に居たい、ということでした。もちろん、知財部門は企業の中で事業の主体ではなく、支援部門、管理部門にあたります。専門部隊として、審査したり助言したりするけれども、最終的にリスクをとってビジネスを進めるのは事業部門であり経営者です。そういう意味では、厳密に意思決定者ではないのですが、「中の人」として当事者意識を持って主体的に考えることが要求されますし、そうでなければ企業内の専門職は存在意義がありません。外と同じ回答しかできないのなら外に出せばいいのですから。

裏を返せば、外部の専門家は、企業から依頼されて戦略まで踏み込んだ助言を求められたとしても、オプションの提示にとどまり、その中でどれを選択するのか(しないのか)、全く別の方策を採用するのか、一部修正するのかなどは企業の中で決定され、実行されます。そして、助言や提言がどのような結果につながったのかのフィードバックはあまり行われることがありません。企業の側に立ってみると、提案を受けた段階で外部専門職への委託内容は完了で、その後についてお知らせする動機がなく、同種の案件が多いのであればフィードバックは意味があると思いつつ、正直忘れてしまうことの方が多いように思います。

このような助言や提案を考えると面白さを見出す方もいらっしゃると思いますが、決めることに重荷を感じる向きもあるようですが、私自身は、考えること自体よりも、それがどのように実行されるのか、実行された結果がどうなるのかに関心があり、プランとアクションを繰り返してフィードバックをかける、PDCAのサイクルを回すところに噛んでいたいという志向のようです。

コンサルティングの要素を増やすなど、このまま外部に居て実現できないかと考えたこともあったのですが、組織に入ってしまった方が実現は楽そうでした。そして、元々組織で生きること特に困難を覚えて退職したわけでもありませんでしたので、ここは素直に企業側へ戻ることにしました。

もう一つ、企業側へ戻る決め手となったのは、自分のメインフィールドと認識していた係争渉外系の仕事の特許事務所には難しいというところもありました。日本の知財訴訟は年間数百件足らず、訴訟になら

ないケースを含めて考えたとしても、企業内で処理が完結されず外部に依頼が出てくる数は非常に少ないため、数少ない専門家に集中する傾向があります。また、企業内にいけば日本に限らず海外の係争渉外ケースについても当然取り扱うことになり、件数も増えますが、外部事務所にはそういうわけにはいきません。

こうした理由により、係争渉外案件が多い業界へ求めて飛び込むことになったのです。

この時の決断は、縁と運とタイミング、というよりも、自ら機が熟したと判断して動いて得たものです。後から考えると、少々熟成させすぎたかもしれない(動くのが遅かった)とも思っています。働き方の柔軟性が重要な時期と位置づけ、これが正解と評価していたわけですが、それは自分にとって楽な状態でもあり、正当化していた側面もあったと思います。結果として、周回遅れに輪をかけた感はありません。

8. 専門職種でのマネジメント

求めて入った係争渉外の仕事は、米国での特許侵害訴訟(常に被告側)を中心に、相当数を扱いました。会社規模、知財部門の規模が小さい割に案件数が多く、対応できる人員に限りがあったため、常に十指に余る案件を2~3人で抱え、全ての案件に深く関与しました。1年ほどは係争渉外を専業にしていたこともあって、短期間で閾値を大きく超える仕事量をこなし、経験値が急上昇しました。

このおかげで、メインフィールドと称して憚らない程度の実務経験を積むことができたと思いますし、実績として社内で認知されたと思います。

一方で、働き方としては、それまでセーブしていた反動もあったと思いますが、やりたい分野の仕事を思い切りできる環境が嬉しく、ワーカホリックのような状況でした。これが天職で本望と思っていましたが、心身への影響もそれなりにありました。期間あたりの投入量を大きく増やすのは劇薬で、効果も高いですが副作用も強いので、それを理解して短期にとどめるべきだろうと思います。

ところで、私が企業知財へ転職したときは、転職年齢の限界と言われる歳をかなり超えていました。世の多くの会社ではマネジメント層に上がっている年代です。そのため、転職活動中、書類選考で落ちた会社もありました。年代的に、マネジャを求めているけれど

も、特許事務所ではマネジメント経験が積めないと考えられ、スペックに合わないと言われたのです。

今の勤務先には、マネジャではなく専門職として採用されたのですが、現在は、知財部門（といってもごく小規模、一桁です）の統括職としてマネジメントをしています。当初は、係争渉外を専門にしていたのですが、現在は、特許の権利化から意匠商標、不競法まで知財に関わるすべてを統括しています。私の上司は知財の専門家ではありませんので、専門部隊の動き方を理解できるように上申し、会社にとって最適な選択ができるようにすることも重要な仕事になります。

他社も見ていると、知財部門のマネジャ（統括職）というのは、知財のプレイヤーからそのままマネジメントをするようになるタイプ、技術開発系の部門のマネジャから横滑りで着任するタイプの2つがあるようです。後者の場合、自ら専門職として動いた経験がないため、そこを補完する部下が必要になります。

知財のみのキャリアであり、かつ、知財歴が部門の中で最も長い私は前者のタイプですが、少人数の知財部門である故に、オールラウンダーとしてワンストップサービスができることが強みとなっています。ここでは、弁理士としての知識・スキルが土台になって、初職や前職での経験が生きていると思います。

現在の課題は、エンジニアから異動してきて日が浅い人をどのように育成していくか、並行して、次世代の統括職をどのように育てていくか、というところになっています。専門職として一人前になるには長い時間がかかると言われますが、少人数では悠長に待ってはいただけません。経験に替える教育をどのように施して促成栽培するのか日々悩んでいます。

9. おわりに

こうして改めて振り返ってみると、岐路に立ったときの意識的な選択、無意識のうちの選択、自ら機会を作り出した上での選択など、色々な形があったように思います。

偶然の縁から始まった知財の世界との関わりですが、その面白さを見つめてみよう、確かめてみようとしてどんどん中心へ向かって動いていきました。

知的財産制度は、成立から相当長い時間が流れ、想定されていない状況が次々生まれ、産業分野による差も大きくなって、歪みも出ていると思います。小手先でない手当が必要な時期に来ているのではないかと思います。また、一企業の立場で考えていると、果たして知財が役に立っているのか？と思うこともあります。

それでも、形のないもの、アイデアやコンセプトをなんらかの形で整理して保護したり動かしたりするための乗り物は必要だと思いますし、私自身は、その中でズームイン・ズームアウトして考えることが楽しい。だからきっと知財の仕事が好きなのでしょう。

初職の同期や大学の同級生、弁理士の同期などを見ていると、半端なく周回遅れになっていると感じますし、今取り組んでいる仕事をあと10年若い時に全力をかけてやることができたらもっと充実しただろうと思うこともあります。とはいえ、これらは全ていわゆる「後知恵」であって、最中に見通して動くなどということはなかなかできないのでしょうか。その時その時の決断を、可能であれば一つのブレない軸を持って行っていくことが大切ではないかと思います。

こんな私の経験が、読者の皆さまに「へえ～」と思ってもらえ、何かしらの刺激になれば幸いです。

(原稿受領 2015. 6. 10)